

平成29年度版

愛えがお顔



感動ものがたり

「感動のエピソード」
& 「愛顔の写真」

愛媛県

広告



想いを、つなぐ。地域を、つなぐ。

心に留まる、伊予銀行のコラムサイト



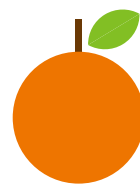
iyomemo



column

お金のことだけじゃない!?

観光や地域のはなし、配信中♪



伊予銀行



未来へ翔ぶ

水樹奈々

 愛媛銀行

愛^{えがお}顔とは？

人と人との助け合い、

支え合いの根底にある「愛」と、

困難にくじけることなく挑戦し、

道が開けた時にこぼれる「笑顔」が

結ばれて生まれた言葉。

愛媛県は、

「愛^{えがお}顔あふれる愛媛県」を

目指しています。



知事あいさつ

愛媛県知事 中村 時広

今回で4回目となる本事業は、愛媛県が提唱する「愛顔^が」を全国に広く発信し、本県の知名度向上と愛媛ファン^えの獲得につなげるとともに、「愛顔あふれる愛媛県」の実現に向け、機運醸成を図るために実施しているものです。

今年度から「一般の部」と「高校生以下の部」に分かれたエピソード部門に、45都道府県と6つの国から3,290作品、写真部門についても、43都道府県から5,322作品もの応募をいただきました。厚くお礼申し上げます。

エピソード部門は、芥川賞作家で「千の風になって」の作曲家でもある新井満さん、若手俳人の第一人者として幅広く活躍中の神野紗希さん、そして私の3人が最終審査を行い、写真部門では、世界各地の壮大な自然や風景を撮り続けてきた本県出身の写真家白川義員さんにも御協力いただき、それぞれ受賞作品を選考しました。

知事賞をはじめとする各賞に選ばれました皆さん、誠にめでとうございます。最終審査に当たり拝見した作品は、どれも「愛顔」と「感動」いっぱいのはばらしい力作ぞろい、選考に大変苦労いたしました。中でも、エピソード部門知事賞に輝いた2つの作品は、ある目覚まし時計をめぐる作者と御主人との温かい絆、家族の幸せと「えがお」を願う7歳の小学生の純粹な気持ちがあがかれており、審査員一同心が揺さぶられました。

今回の受賞作をまとめた本作品集を多くの方々^が御覧になり、全国各地に「愛顔」の花が咲き誇ることを切に願っております。

終わりに、応募いただきました方々をはじめ、本事業に御協力を賜りました関係者の皆様に深く感謝を申し上げます。

目次

「エピソード部門」一般の部

「知事賞」	笑顔の魔法	長友 奈奈	(熊本県)	8
「特別賞」	海辺の生活	西岡 奈緒子	(神奈川県)	10
「優秀賞」	あなたに笑ってほしかった	山崎 理恵	(山口県)	12
	アマゾンからの愛顔	井川 實	(東京都)	14
	見えなかったもの	宮崎 祐希	(長野県)	16
「入選」	伝えたい気持ち	荒木 直美	(北海道)	18
	東京タワー	山田 修	(神奈川県)	20
	再会	福島 千佳	(奈良県)	22
	約束	牧 ゆう	(愛媛県)	24
「等身大」の喜び		三堂 真由子	(大阪府)	26
「佳作」	ピンクの柩	松本 陽子	(埼玉県)	28
	奇跡のほほ笑み Abbey makes me happy	グレン やす子	(アメリカ)	29
	真弥ちゃんがくれた笑顔	吾妻 康子	(宮城県)	30
	笑顔の花咲く施設にて	尾川 久美子	(愛知県)	31
	愛と笑顔は最高の薬	中農 容子	(大阪府)	32
	ほんまに、ありがとう!	坂本 ユミ子	(兵庫県)	33
	シャッターチャンス	星野 有加里	(宮城県)	34
	ばあばのお目め	湧川 あいみ	(沖縄県)	35
	《ドンドンばあばあ》の思い出	福島 洋子	(長崎県)	36
	祖父の置き土産	岩渕 里恵子	(岩手県)	37

「エピソード部門」 高校生以下の部

「知事賞」 えがお

「特別賞」 「生きること」「食えること」

「優秀賞」 絶品！笑顔の三十五段ビッグバーガー

心つなくお接待

「感謝する」ということ

「入選」 温かなバス

おとしもの

笑ったら明日もまた来なくなる

大好きな先生

おじいちゃんの絵手紙

「写真部門」

◎一般の部

「知事賞」 一休み

「白川義員特別賞」 キラキラの海と愛顔

「河原学園賞」 ママのほっぺにチュウ

「優秀賞」 泥んこ笑顔

未来永劫

ままさん、元気出して！

「入選」 カミさんの一番の笑顔

お腹をかかえて大笑い

菜の花でゴロン

全部で90個、ギョウザのできあがり！

おかしくてたまらない

上野 真子	(愛媛県)	小学生	40
山口 涼加	(愛媛県)	高校生	42
武智 旭飛	(愛媛県)	中学生	44
藤田 桜子	(愛媛県)	高校生	45
水成 友美	(愛媛県)	高校生	46
大下 雅子	(愛媛県)	高校生	47
泊 萌花	(愛媛県)	高校生	48
森山 ひかる	(千葉県)	中学生	49
長谷 咲季	(愛媛県)	高校生	50
河野 真希	(愛媛県)	高校生	51
秋田 寿美	(大阪府)	54
金子 ふみ	(愛媛県)	54
福本 将太	(愛媛県)	54
雪本 信彰	(高知県)	55
佐々木 順哉	(埼玉県)	55
横山 彰仁	(静岡県)	55
倉田 康平	(東京都)	56
阿蘇品 祐子	(熊本県)	56
戸塚 知美	(愛媛県)	57
宮谷 伸司	(愛媛県)	57
宮川 伸	(高知県)	57

◎高校生の部

「知事賞」 ハニカミ王子

「白川義員特別賞」 鳩のつちやった!

「河原学園賞」 となりで。

◎中学生の部

「知事賞」 どんご祭りの早乙女たち

「白川義員特別賞」 造作

「河原学園賞」 もう、撮らんといてや〜

◎小学生の部

「知事賞」 妹の夏祭り

「白川義員特別賞」 弟のお風呂

「河原学園賞」 笑顔でカウントダウン、3・2・1!

一般の部 「愛媛広告協会賞」 幸せのひとつとき

「愛媛県商工会議所連合会賞」 おさるさんといっしょ

高校生の部 「愛媛経済同友会賞」 祖父と祖母の微笑み

「愛媛県IT推進協会賞」 ピース!

中学生の部 「愛媛県歯科医師会賞」 とったぞ・

「愛媛県理容生活衛生同業組合賞」 夜は更けていく

小学生の部 「愛媛県獣医師会賞」 1人でおきがえできたよ☆

「愛媛県情報サービス産業協議会賞」 さくらスマイル

田中 津宮美 (愛媛県) …… 58

羽石 桃子 (神奈川県) …… 58

蓬菜 あみ (兵庫県) …… 58

栗田 音羽 (愛媛県) …… 59

赤間 七緒 (東京都) …… 59

山口 智大 (愛媛県) …… 59

丹羽 凜空 (宮城県) …… 60

林 花菜 (大分県) …… 60

金谷 美羽 (愛媛県) …… 60

馬場 歩 (埼玉県) …… 61

尾崎 祐輔 (愛媛県) …… 61

平林 柚葵 (長野県) …… 61

下河内 萌生 (広島県) …… 61

木原 美羽 (愛媛県) …… 62

高橋 菜々美 (愛媛県) …… 62

窪田 宜久 (愛媛県) …… 62

大畷 脩斗 (愛知県) …… 62

「エピソード部門」一般の部

「知事賞」

笑顔の魔法

長友 奈奈（熊本県）

幼い頃、自分は世界一幸運な子どもだと信じていた。

それには理由があった。

ミッキーマウスの目覚まし時計。

母がくれたものだ。

「奈奈、この目覚まし時計にはね、魔法がかけてあるの。

この目覚ましを自分で止めて起きた日には、必ずいいことが起こるのよ。」
魔法の物語が大好きだった私は、とび上がって喜んだ。

次の日から、私の人生はひっくり返った。

通学路でいつも吠える犬が吠えない。

席替えでは仲のいい友達隣の隣になるし、運動会や遠足の日はずっと晴れた。

この目覚まし時計があれば、私はずっと幸運でいられる。

そう思っていたのに。

ある朝、ベルが鳴る前に目を覚ました。

見てみると、目覚まし時計が止まっている。

「壊れたんだ」

私は真っ青になった。

その日から、今まで溜まっていた不運が私のドアをノックした。

高校受験では受験票をなくす。

入学式の当日に転んで前歯を折る。

バレンタインでは、チョコを入れる靴箱を間違えるという失態までした。

母のかけてくれた魔法は解け、私は世界一幸運な子どもから普通に運が悪い人になってしまった。

そんな私も、不運続きだったわけではない。

結婚したい、と思える人に出会えたからだ。

プロポーズされた時、自分の運のなさとその理由を伝えた。

そんな私を、彼は受け入れてくれた。

新居が決まって引越した夜、私の人生は再びひっくり返ることになる。

新生活のお祝いに、と彼がプレゼントをくれた。

ミッキーマウスの目覚まし時計。

母からもらったものとデザインは少し違うけれど、

それは確かにミッキーマウスの目覚まし時計だった。

「この目覚まし時計には、魔法をかけてあるんだ。

どんな魔法かは、奈奈がよく知ってるよね。

約束するよ。もし何もいいことがなかった日には、

俺が魔法の代わりに奈奈を笑顔にする。」

プロポーズされた時よりも、指輪をもらった時よりも

私は泣いた。そして二人で笑った。

夫がかけてくれた笑顔の魔法は、今も解けていない。

「特別賞」

海辺の生活

西岡 奈緒子（神奈川県）

「生きてるのがつらいです」

中学生の私は、ハガキに自分の想いを綴った。学校生活に馴染めず、将来への漠然とした不安に押しつぶされそうで、なんで生きているのだろう、と悩んでいた。誰かに聞いてほしかった。

日曜日の夜、FMから流れるDJの声と音楽で部屋が満たされるのが、わずかな楽しみだった。

「今日は最後に中学生のFさんからのハガキを紹介します。『生きているのがつらいです』というハガキをいただきました。これは自分の顔かな、女性のイラストが添えられています」

私のハガキが読まれた。

「Fさん、最近、五分以上、空を眺めていますか。学校や塾以外にも世界はありますよ。僕はFさんに生きてほしいな」

涙が溢れてきた。波の音が聴こえる。この番組は「海辺の生活」という。

何日かして、郵便物が届いた。番組に何の連絡も来ないから心配している、とディレクターが番組を録音したカセットテープを送ってくれたのだ。私はすぐに返事を書いた。顔も知らないのに、私のことを想ってくれる人がいる。嬉しく感じた。

数週間後の放送で、私のハガキに寄せられたリスナーの声を取り上げられた。数多くの声が寄せられたそうだ。一人ひとりの言葉を聴きながら、ラジオの向こうにいる人たちの笑顔を想像した。

生きているのがつらい。すぐに笑顔になることはできないけれど、誰かが悲しむのは見たくない。もう少し生きてみよう。空を見上げた。空は私を想う人とつながっている。そう思えた。

「海辺の生活」の満さん、リスナーの皆さん、お元気ですか。二十年以上たった今、たまに空を眺めることはあるけれど、私は生きているのが楽しいです。

「優秀賞」

あなたに笑ってほしかった

山崎 理恵（山口県）

それは、私と祖母のサプライズのはずだった。当時九十四歳の祖母は、半年前から急に足が立たなくなり、自宅で車椅子生活を送っていた。活動的で、何事にも前向きな祖母だったが、突然始まった車椅子生活が相応なストレスだったのだろう、認知症を著しく進行させ、日に日に笑顔をなくしていた。

そんな時、八百屋の店先で青梅を見つけた。祖母の梅干しは毎年好評で、漬けては皆に配り、しわしわの笑顔をふりまいていた。——そうだ！帰宅するなり、私は祖母に梅干し作りを頼んだ。たくさん漬けて、皆を驚かせよう、と。——初めこそ、出来ん、と断られたが、一緒にやる、と言うと嬉しそうに笑った。

八百屋に頼みこみ、不揃いの梅とシソを安く譲ってもらった。「料理にも使うからシソは多めね」「東京のいとこ達にも送ろう」「みんな喜

ぶだろうなあ」などと、私の声がすべて聞こえていたかは怪しいが、祖母は生き生きしていた。一粒一粒、愛しそうに見つめ、結局、私が手伝うことはほとんどなかった。「さあ、うまくいくかな。」祖母は、いたずらっぽく笑い、「楽しみじゃね！」と私が言うと、今度はゆっくり、目を細めた。

「ほんと、楽しみじゃ・・・。」

——しかし、祖母は梅を口にする 것도、皆に配ることもなかった。その夏に老人ホームに入居し、病院へ移り、そのまま旅立ったからだ。私は、葬儀が終わると、親族やお世話になった方々へ祖母の最後の梅を配った。皆、驚いていた。そしてとても、嬉しそうだった。大切な人が亡くなったというのに、その笑顔につられ、私も笑っていた。

「またうちのがない。」帰って笑いながら写真の祖母に報告し、瓶のあった所をなでた。するとその奥の奥に、桃色の包みを見つけた。「りえちゃんへ」震えた字は、間違いなく祖母の字だった。そして中はシソがたくさん入った梅干しだった。——すっぱくて、胸が一杯で、泣きながら笑い、祖母の笑顔を想った。

「優秀賞」

アマゾンからの愛顔

井川 實（東京都）

約束の午前八時、パソコンを開くと、いきなり地球の向こう側、ブラジルのアマゾン川河口のベレン市の病院にいる友人のまっ黒く日焼けした人懐っこい愛顔が現れた。

「よお！ 元気そうじゃないか？」

時差は十二時間。向こうは午後八時のはずなのに、起きぬけの若者のように弾んだ声だ。

「おまえに言われると思わなかった！」

私は苦笑した。たしかに歳は私より二つ若いが七十五の後期高齢者だったし、末期のすい臓がん患者だと知っていたのに・・・。

「それより、どうだ？ このスカイプ！ こいつのおかげだよ！ これならわざわざアマゾンまで見舞いに来ることねえだろう？」

彼は得意げに、そばにいた長女の肩を抱いて見せた。たしかに、昔ト

メアスの農園まで行くのに日本から三十五日かかった。そんな遠くに
いる五十数年来の旧友と僅か数秒で再会できるなんて、夢のようだった。

私たちは学生時代ブラジルへの移住に憧れて、ブラジルの研究やポ
ルトガル語の勉強、北海道の開拓農家での農業実習や一年間の南米研修旅
行などを共にした仲間だった。その後彼だけは、日本の混血戦争孤児の
ためのエリザベスサンダーズホームの建設に協力するため大学を中退
して移住し、長い年月をかけて念願の大農園主になり、私は家の都合で
移住を諦め、日本に残り、彼の応援に回って、ずっと付き合いを続けて
いたのだった。

その日私たちはゆっくりと思い出話に花を咲かせ、途中気分が盛り上
がって「お互いの健康と再会」を祈ってビールで乾杯までしたのだが、
なんと、二日後、彼はあっけなくこの世を去ってしまったのだった。

「父は『あいつとの最後の話を楽しく終わりたいんだ』と言って、あの
日、準備運動して、私に顔の化粧までさせたんですよ」

後で彼の長女が話してくれたが、その顔は彼のそれと瓜二つと言って
よいほど穏やかで親しみのあるすばらしい愛顔だった。

「優秀賞」

見えなかつたもの

宮崎 祐希（長野県）

今まで、自分の顔があまり好きではありませんでした。

私は女性なのですが、輪郭がしっかりしていて目が細く、眉毛がみっしり生えている、いわゆる男顔です。似ているという有名人は男性で、以前アルバイトでレジ係をしていたときは、小さな女の子に「おにいちゃん！」と呼ばれていました。その頃にはもう諦めがついていて、女の子の母親がお姉ちゃんですよ！とたしなめるのを、どっちでもいいですよーと笑うのが当たり前になっていました。

そんな私も成人したころ、初めての恋人ができました。しかし彼と会うたびに、諦めがついたはずなのに、心のどこかがそわそわします。私のような男顔では、男性が二人にいるようにしか見えないのではと不安になります。ならばとデニムをストレートから細いスキニーにしてみても、マスカラで睫毛を伸ばしてみても、なんだか全然似合いません。さ

らに追い討ちをかけるように、とても華奢で大きな瞳の、白が似合う素敵な女性が彼の隣で微笑んでいる、そんな夢を何度も見ます。

ついに耐えきれなくなり、私は彼に聞きました。こんなお兄ちゃんみたいなのどこがいいのかと。

「え、顔！」

彼は満面の笑みを浮かべてきっぱりとそう言い切りました。反射的に嘘でしょう、と大きな声が出ました。しかし彼は続けます。

「普通にしていると凛々しい！って感じだけど、笑うと何かふわっとするよ。どっちもいいと思う」

そんなことを言われたのは生まれて初めてでした。今まで笑顔を褒めてもらったことなどなかったのに、なぜ。

少し考えて気付きました。私はこの人が心から好きで、彼に向ける笑顔は、これまでの私の笑顔とは違うのかもしれないと。

いつか、彼が言ってくれるように、私も私の顔が好きだと言える日が来るのなら。凛々しくてもいいかなと、彼の愛顔を見ながら思うのでした。

「入選」

伝えたい気持ち

荒木 直美（北海道）

夫の初七日がすぎて、長女家族（千葉）と二女家族（東京）が帰った。空港からの帰り、長男の車に家族三人が乗り、私の車には孫の智博（小学四年）が乗った。

走行中、街路樹のイチヨウの葉が黄色に染まってハラハラと一枚ずつ落ちてきた。助手席の智博に私は言った。

「きれいだね。おばあちゃんはイチヨウの葉が好きだよ」

翌日、学校の帰りに三十分かけて自転車に乗って、汗びっしょりかいて、荒い息づかいをしながら智博が我が家にやってきた。

「ハイ！おばあちゃんの好きなもの」

カバンから大事そうに取り出したのは、たくさんのイチヨウの葉だった。

夫を亡くして、喪失感から泣くことが多くなった私を見て、喜ぶだろ

うと思ひ、放課後に校庭で拾ってきたのだと言つた。

熱いものが胸の中に広がってきて、涙があふれた。何も言わなくても、私の心に寄り添ってくれた優しい気持ちがあうれしかった。

「ありがとう。うれしいね。すごく、うれしいよ」

イチヨウの葉にはまだ、手の温もりが残っていて、茎はきちんとそろえて、輪ゴムでまとめていた。

その葉束をそつと夫の仏前に供えて私はまた泣いた。友だちが帰り、誰もいなくなった校庭で、たったひとり、私のために、木の下でイチヨウの葉を拾っている姿を想い浮かべて嗚咽した。黄色に輝くイチヨウの葉は、温かな心と同じ色にみえた。智博は私と並んで仏前に手を合わせながら、自転車に乗って帰っていった。ひとまわりも大きくなつたうしろ姿に、私はいつまでも手を振りつづけた。

優しい気持ちに癒されて、私は少しずつ心が回復していき、笑顔が戻つた。

夫が旅立つてからもうすぐ十一年目。今年もイチヨウがきれいに色づくのだらうと、街路樹を眺めた。

「入選」

東京タワー

山田 修（神奈川県）

夏休みの宿題に、皆が「東京タワー」を作った。田舎でも完成が話題に成っていたからだ。友達はプラモデルを買って貰って宿題の工作にした。小学生の時だ。

「オイも欲しい」母に言ったが、寂しい顔をするだけだった。それ以上は言えなかった。父は既に退職し、家に余裕がなかった。

「自分で出来ないかな」、寂しい思いで、新聞に載った写真を観ていた。隣の部屋から、お祖母ちゃんが笑顔で励ました。

「竹ヒゴで作ればいいよ」、「あっ、そうだ」、部屋に籠って、毎日、毎日熱中した。母が夜食に、おにぎりや玉子焼きを作ってくれた。祖母が隣の部屋から楽しそうに観ていた。

竹ヒゴと厚紙だけで組み立て、絵具で色を付け、ニスを塗った、エレベーターも動く、背丈程の立派なタワーに、自分でも満足した。「上手

く出来たな」父が感心した。

学校の作品展で「金賞」を貰った。県のコンクールでも入賞した。校長先生から賞状を貰った。嬉しくて、早く父母に見せたかった。飛んで帰った。

晩ご飯は、鯛ご飯と玉子焼き。御馳走が並んだ。父も母も喜んだ。兄も姉も帰って来た。家に笑顔が溢れた。

母は少し寂しそうだった。息子に我慢を強いている思いがあったのだ。

「東京タワー」は展示会を転々として帰って来た。新聞も地域版で報じた。狭い町内のことだ。直ぐに噂が広がり、見物客が押し掛けた。母は嬉しそうだった。笑顔でお茶を配った。皆の褒言葉に心が晴れたのだ。

「頑張って良かった」、母の喜ぶ顔が何よりも嬉しかった。校長先生から賞状を貰った時よりも嬉しかった。

暫くして、家の近くの浜辺で焼いた。賞状も焼いた。祖母にも見せたかったのだ。祖母は楽しそうに観ていたが、完成を待たずに逝っていた。煙が真っ直ぐ天に登った。お祖母ちゃん的笑顔が観えた。

「入選」

再会

福島 千佳（奈良県）

息子が五歳の夏休みだった。主人は長期出張でアメリカ、ポータランドへ六か月間不在。パパが大好きな息子の口癖は「パパいつ帰る?」。毎日毎日、パパに会いたがって仕方なかった。そこで夏休みの一か月、思い切って息子と二人で、パパの住むポータランドへ遊びに行くことにした。

飛行機での移動時間は、乗換えを含めると二十一時間。五歳にとっては、とてつもない長旅。走り回ることも、騒ぐこともできず、それでも息子は、パパ会いたさに必死に我慢をした。

移動中、声を掛けてくれた人には、相手が英語だろうが日本語だろうがお構いなしに

「パパがポータランドでまってんねん」と、使命感に燃えた目をして、語りかけていた。

「ぼくは、とおいとおい、パパのところへいくねんで」

ようやくポートランド空港に到着した。イミグレーション（入国審査）でも、英語で質問する女性に「パパにあわせてください」と日本語で答える。五歳の息子のまっすぐな想いは、イミグレーションの女性をも笑顔にさせ、その想いは数分後によく叶った。

ゲートを出ると、三十メートル程先に、主人はひとり笑顔で待ってくれていた。

すると主人を見つけた息子の顔が一瞬で輝き笑顔になった。息子の手が、わたしの手をするりと抜けた。そして、空港中に響き渡る大声で「パパー！」と叫ぶや、小さな身体で精一杯走り出した。周りの人たちが、振り向く。手をたたく。歓声をあげる。

ようやく会えたパパの腕の中で、喜びで泣き叫ぶ息子。周りの大人たちがそんな様子を温かい目で見守ってくれた。

あれから十年、泣き虫で甘えん坊だった息子は、大きく成長し、パパの身長も超えた。あの五歳の夏休み、あれは、彼なりの大冒険だったのだと、今は思う。

「入選」

約束

牧 ゆう（愛媛県）

長男の校内マラソン大会が行われたのは私が独りで子供達を育ててゆく決意をした年の冬だった。練習でいつも持って帰る「1」と書かれた順位札。穏やかで聡い兄が自慢な次男は「でも、おにいちゃんは競争になったら負けるんよ」と心配する。たしかに、競り合いが苦手で、運動会の障害物競走では最初に網に入って最後に出てくるような子だ。

本番前夜、私の首に華奢な腕を巻きつけて

「おかあさん、明日も1番になるから、もう泣かれんよ」。

愕然とした。私は、まだわずか8つの彼にこんな思いをさせていたのか。その頃、私を支配していた子供達を育て上げることへの底知れぬ不安。長年ハウスワイフだった私が仕事を持ち、父親の役目もしながら、やがて訪れる反抗期や受験を乗り越えられるのか。

「笑って応援してる、約束するね」と答えるのが精一杯だった。

当日、使い慣れないムービー持参で学校へ。二番手を大きく引き離し校庭を出ていった長男が数人と纏れるように戻ってきた瞬間、私はそれを足元のバッグに放り込んだ。この子の姿を捉えるファインダーはただひとつ。この目で、見届けるのだ。私は私に約束する。これからの日々は試練ではなく使命だ。確固たる信念と責任を掲げて発つ人生の船に彼らを乗せるのは私自身ではないのか。私のオールに勇気をくれることを約束した、他の子よりひとまわり細い長男の、力強いストライド。次に泣くのは子供達の大学の卒業式だ。

長男が持って帰った賞状に記された「三等賞」。

ごめんねとうなだれる彼を、飛びついてきた次男もろとも抱きしめる。君はちゃんと、約束を守ったじゃないの。でも、君のゴールが涙でまったく見えなかったことはずっと内緒にしておこう。

今、私の部屋にふたつ置かれた大学の卒業証書。十九年前の、自分への約束は果たせたのだろうか。

「入選」

「等身大」の喜び

三堂 真由子（大阪府）

右上腕分^{みぎじょうわんぶん}腕^{べん}麻痺^{まひ}。それが私の生まれもった障害の名前だ。右手が思ったように動かないのは有体に言えば「不便」だった。左手が荷物で塞がってしまつと、傘をさすことさえ困難で、首に挟んだりもした。

そんな私だが小学校に上がり、兄がやっていたこともあつて剣道を始めた。

しかし、中段の構えが思ったようにできず、上段の構えでやるようになった。

上段の構えは小中学校では禁止されており、高校生から許される。特例として私は小学生で上段の構えを許された。

大会にも出た。個人戦で初めて一勝できたとき、負けて悔しくて泣いている対戦相手のお母さんはこう口にした。

「あの子は『ズル』をしているんだもの。しかたがないわ」

頭をガツンと殴られた気がした。望んでこの身体に生まれたわけでは

ない。だが、障害を持っているうえ、自分なりの方法で皆と同じことをするのさえ、責められた気がした。

その日も、私は一回戦を勝ち抜くことができた。試合が終わったあと、対戦相手は涙をこぼしていた。彼女のお母さんが傍に寄り添っていた。あの言葉が来るだろうことはわかった。

「だってあの子は『ズル』をしているんだもの。しかたがないのよ」
次の瞬間、彼女が母親の言葉に噛み付いた。

「そんなこと言わんとって！あの子が一生懸命なのわかるもん！」
それを聞いて、私の頬にも雫が伝っていくのを感じた。そのままの私を受け入れてもらったように思えて、嬉しかった。

この身体に生まれてよかったと、そう思う。言葉一つ、視線一つに気を遣い、多くの言動を慎んできた。人からなにげなく放たれた心ない一言に傷つくのは日常茶飯事だ。

けれども、なにげない一言に傷つくぶんだけ、なんでもない一言に救われる日々を送っている。

「等身大」に見てもらえることがなにも代えがたい幸福よろこびだということを知ることができたのは、障害者として生まれた特権なのだ。

「佳作」

ピンクの柩

松本 陽子（埼玉県）

「今僕の腕の中で母は逝きました」という電話。甥が泣いている。私を一番可愛がってくれた姉が亡くなった。朝夕掃除の仕事を数十年も続け、やっと定年になり自由になれたのに、生活リズムが変わったせいとか、認知症になつてしまった。元気な時豊かでもないのによく私をコンサート・リサイタル・ミュージカル等に誘ってくれ、座席はいつもA席だった。休憩時間になると、ピカピカの大理石のホールのテーブルに、「はいお弁当」とおにぎりとおペットボトルを出される時は、場ちがいで内心恥ずかしかったが、姉の笑顔には逆えなかった。大病院に通つてはいたものの姉の病は進行するばかりで、とうとう義兄は介護疲れか旅立ってしまった。その後独身の長男が自分の会社の近くの介護施設へ入れ、毎晩会社帰りに寄つたが、姉は無表情で、口もきかない。うつろな目をした母に彼は耐え切れず、週末だけ自宅に連れ帰った。

すると表情は柔らぎ「ありがとう」とさえ言うようになった。彼は意を決して退職願を出し、姉を自宅に引きとった。

男手一つでさぞ大変だったろう。

週二回デイサービスも受けたが他の日は抱いてお風呂に入れたという。「いい顔するんですよ。なあに35キロだから楽なもんですアハハ」思わず涙がこぼれた。

葬式の日驚いたのは淡いピンクの花模様の柩だった。中にはピンクの毛糸の帽子をチョココンとかぶった、まるで童女のような可愛い姉がいた。

「母はピンクが好きでしたから」と照れる彼を見て、なんとやさしい子なのだろう。

又こんな子供に育てた姉はなんと立派な子育てをしたのだろうと思つた。

「人は生きたようにしか死ねない」とか。

姉はすっかり生きたから、幸せな最期を迎えられたのだらう。

奇跡のほほ笑み

Abbey makes me happy

グレン

やす子（アメリカ）

この子で、53人目のフォースターベビー。エビーちゃん。我家から養子縁組で旅立つ子供達。

アメリカ生活33年以上過ぎた私にとって、この社会状況を真に受け、この子らに手を差し延べる事を決意し、フォースターマザーになりました。昼夜かまわず我家に来る新生児や乳幼児達。生みの親、保護者は、薬物アルコール中毒者、受刑者、育児放棄、虐待、ホームレス等々、ありとあらゆる理由で政府機関が子供達を保護し、我家に連れてきます。

親達は、子供の顔すら覚えてない、何と言うむなしさ。53人目のエビーちゃんは、生後9ヶ月で、親の薬物中毒、乳幼児虐待で、保護されました。彼女の顔は、キズだらけで腫れ、声帯もダメになり、発達状況も最悪で、大人を恐れ、音を恐れ、声かけを恐れ、体に触れる事を恐れ、全てに恐怖感を抱いていました。一番成長期で、可愛らしい時期に、ほほ笑みを浮かべる事すら忘れ、いやさなくなってるエビーちゃん。可哀相と思うより、どうにかしてあげなきゃとの思いが優先し、24時間体制で愛顔で育児に専念しまし

た。約8週間が過ぎても、おもちゃで遊ぶ事すら、声を出す事すら、何も欲求を示さないエビーちゃん。一日中、プレーヤードの片隅にうずくまってるエビーちゃん、時折、私の姿を上目遣いで見ているエビーちゃん。それでも私は、毎日、毎時、ほほ笑みを絶やさず愛顔でコミュニケーションを取っていたある日、エビーちゃんが、突然「アー」と言う声と同時にほほ笑んでくれました。とっさに日本語で、「ありがとうエビー」と言い、私を信頼してくれた彼女を愛顔で抱きしめてやりました。

愛顔には、国境はいりません。年令、言葉、顔が違って「えがお」は、お互いの信頼を築いてくれる最高の武器です。エビーちゃんの奇跡のほほ笑みが、私を幸せにしてくれました。苦労もなんのその愛顔が他の何よりも勝る事を気付かせてくれたエビーちゃんです。

「佳作」

真弥ちゃんがくれた笑顔

吾妻 康子（宮城県）

2016年7月。92歳の姉は、特別養護老人ホームで3年目の夏を過ごしていた。独身だったので末妹の私が「身元引受人」になり、月に2、3度見舞った。心身の変調がみえたのは東日本大震災の頃。「一人暮らしはもう無理だから」と説得して、施設でお世話になることにしたのだ。

訪れる私の顔を見て「あーよかった」と手まで広げて喜ぶ日。「康子だよ」と声をかけても全く無視する日。感情の起伏が激しくてとまどうことも多かった。

その日、カナダへ嫁いだ姪が娘と千葉の母親を連れて見舞ってくれた。1年ぶりだ。姉のもう一人の妹夫妻も集まり、6人で円卓を囲んだ。困ったことにこの日の姉はとても機嫌が悪い。みんなが話しかけても、キツとした硬い表情のままだ。このままでは困る。何とかしなければ…とあせる私。

姪の娘に声をかけた。「真弥ちゃん、けいおばさんへお名前を英語で教えてあげて」。姪が通訳。すかさず真弥ちゃんが「マイ ネイム イズ マヤ・サザーランド」。みん

な歓声をあげて手を叩くなか「ワット イズ ユア ネイム？」と姉の顔を見た。と、「マイネーム イズ ケイ・カタギリ」。仏頂面から破顔一笑とはこのこと。大きく口を開けて笑いながら即答したのだ。「すごい！すごい！けいおばさんは英語も分かるのねえ」とほめる姪の言葉に、みんなうなづいて笑顔になり拍手。雰囲気が一気に和んだ。間もなく面会時間が終わる。車椅子で自室へ戻る姉の姿を、ほんわかとした気持ちで見送ることができた。

真弥ちゃんありがとう。

けいおばさんはあの日から半年後、93歳でお星さまになり天へのぼったよ。8歳の真弥ちゃんからもらった「笑いのタネ」を思い出しながら「まやちゃん！ サンキュー！」と、今日も明日も笑って手をふっているかもしれないね。

笑顔の花咲く施設にて

尾川 久美子（愛知県）

ピアノを演奏する私は、高齢者施設へ歌の訪問をしている。きっかけは、祖母の施設へ面会に行った時の事。広いリビングに置かれていた一台のピアノ。「童謡を弾くので皆で歌いませんか。」と提案したのが始まりである。祖母は102才。歌が大好きで艶のある歌声は、とても102才とは思えない程だ。

施設での昼食後、皆の最も楽しみにしている娯楽の時間がやって来る。午後二時頃だろうか。「始まるよ」「今日は何を歌おうかな」賑やかな会話と共に車椅子の方々が続々と集合。ホワイトボードに歌詞を書いた大きな紙を貼り、曲の順番を確認し私の準備は完了。もうすぐたくさんの笑顔に会える。ワクワクドキドキ。「こんにちは」「お元気でしたか」「今日は暑いので夏の歌を用意して来ましたよ。一緒に歌いましょうね。」両手を高く挙げ喜ぶ人。体を前後に揺らす人。音楽が始まると、かすかではあるが指先を動かす人。上手ではなくてよい。無理して声を出す必要もないのだ。何かを感じてくれればそれでよい。集まった20

名程の皆さん。一人一人の今日の笑顔は、最高だ。「海は広いな大きいな」。三拍子なので両手で大波を打ちましょうか。腕を左右に振ってみて」すると一齐に会場が海に大変身。細い指先のさざ波。太い腕のゆったりした大波。大合唱が始まる。懐かしい歌に出会う瞬間は、ふと若かりし自分と良き時代へのタイムスリップした感覚なのだろう。嬉しそうな笑顔がそこにある。血行が良くなり、うっすらピンク色の艶っぽい表情になっていく。長い人生を歩んで来られた思いの詰まった偽りのない表情がそこにある。

楽しい時間が終わった後も、興奮が止まらない。涙を流して感謝して下さる人、私の手を強く握りしめ「また来て」とおっしゃる人、いつまでも歌っている人。しわくちャの笑顔こそ私に活力を与えてくれる最高の贈りものだ。夏のひまわりの様な笑顔がそこにはある。

愛と笑顔は最高の薬

中農 容子（大阪府）

私はOL、お局。結婚3年目。32歳。主人は自営業。30歳。仕事以外の事は自らやらないタイプ。お願いすればやってくれる程度。私達は付き合って8年で結婚。旅行好き温泉好き。そろそろ子供が欲しいなと思っていた頃、子宮頸癌が発覚。子宮全摘出が告げられた。

絶望したが癌を克服し旅行に行こうと楽しみな目標を作り紆余曲折しながら家族、友人にとてつもない愛情をもらい、助けられ癌を克服した。治療が終わる事が決まり草津温泉に行く予約をした。

旅行の内容はいつも全て私が決めている。やっと旅行に行けるまで回復した。楽しみでしかたない。そうだ。ここまで一番近くで支えてくれ一番迷惑をかけた主人に手紙を書こう。素直な気持ち感謝の気持ちを伝えなければ。温泉で渡そう。と手紙を書いた。

当日、夕飯後部屋で渡すと決めていた。この後手紙を渡すと思うとちょっとドキドキした。レストランに行く個室に案内された。よかったー。薬の影響で髪の毛が無く帽

子を被っている私は喜んだ。

席に着くとドリンク一杯サービスです、と。プランに記念日の方は一杯サービスと書いてあったが頼んでないのに何かの手違いかな、まあラッキーと思い食事をし残すはデザート。ご飯も最高においしくて生きていてよかったー。デザートが来た。あれ、ホールケーキ？こんな豪華なデザート？と思っていると店員さんがこちらお連れ様からですと。ケーキには快気祝いおめでとうの文字が。えっ。なんでー。驚き喜び感激した。

そういえば、主人に何回も旅館の名前を聞かれた事を思い出した。私が帽子脱ぎたいのも知っていて個室に、ドリンクも全て主人の手配と気付いた。主人と出会って11年初めてのサプライズ。こんな準備をしてくれていたなんて。ドラマでよく見る心がズキューンを体感した。

主人を見ると私の反応を見て照れながら最高の笑顔。愛情に溢れた優しい笑顔。もらった愛情を今度は私が周りに返さなければ。

「佳作」

ほんまに、ありがとう！

坂本 ユミ子（兵庫県）

「当たったよ！」

夫と義父が笑顔で帰ってきた。仮設住宅の抽選に当たったのだ。それも私たちが住むJR摂津本山駅のとなり駅、住吉駅から徒歩五分の近場だった。

一九九五年一月十七日阪神大震災―神戸市東灘区にある私の住むアパートは無事だったが、同じ町内に住む義父母の家は全壊した。その日から二DKのアパートの六階で、義父母、夫、娘との五人暮らしが始まった。三宮にある夫の店も全壊、義母は二月に神戸市民病院で股関節の手術を受ける予定だったが、延期になった。仮設住宅当選は久しぶりの明るい出来事だった。さっそく引越し業者に電話した。すでに予約が一杯なので、三月は無理とのことだった。他の業者にも電話したが、状況は同じだった。

そんなある日、避難所になっている本山第一小学校に行ったときだった。伝言板に貼られていた一枚の紙に目が止まった。

「仮設住宅への引越しのお手伝いいたします。K大学・学

生部」

すぐに電話してみると、明日にでも伺いますとのことだった。二日後に引越しとなった。早朝から男女五人の学生さんが軽トラックと共に来てくれた。全壊した家から冷蔵庫や無事だった家具、仏壇を運び出すのは危険で大変な作業だったが、誰一人文句も言わずに黙々と働いてくれた。軽トラックに荷物を乗せ、何往復もして仮設住宅に運んでくれた。

学生さんの中には家が全壊して、避難所で暮らしている人がいた。学生寮が全壊して、友人を亡くした人がいた。引越しが終わったとき、義母が心付けの入った封筒を五人に渡そうとしたが、誰も受け取らなかった。

「お役に立てて嬉しいです。次があるので、失礼します！」
学生さんたちは笑顔で去って行った。すぐそこまで来ている春のあたたかさを感じた一日だった。

シヤッターチャンス

星野 有加里（宮崎県）

「パパ、写真撮ってよ！」

薄紅の桜。碧い海。赤や黄色の紅葉。今までどんなに美しい風景を背にして私が立っても、一眼レフを手にした父は、いつも首を横に振ってばかり。「俺は人物は撮らないよ」と。

父は風景写真家。撮影を兼ねて、私が幼い頃から家族旅行にはよく連れていってくれた。だが、カメラ越しの父の目線の先は決まって自然が織りなす絶景。「娘より景色が大事なの？」と子供心に不満や反発を感じていた。

いつしか諦め、旅先で写真を撮ってと父にねだらなくなった。そして、成長するにつれ、家族で旅行をすることもなくなっていくた。

歳月は流れ、不惑を迎えた私はようやく結婚を決めた。故郷を遠く離れた南国へと嫁ぐ。

嫁入り前夜、父が撮った風景写真に飾られた居間で、寂しがる母としんみり話をしていた。見知らぬ遠い新天地での結婚生活。正直、喜びよりも不安が胸を占拠する。その内に、母が何冊ものアルバムを引っ張り出してきた。数々

の風景写真は家族旅行の思い出。肝心の家族が一人も映っていない珍妙な家族アルバムを、母と苦笑し眺める。少女の頃は、娘の成長より四季の移ろいを優先させるのかと父を恨んでいたが、大人になった今なら、それすらもう笑い話だ。思い出話に花を咲かせていると、父が数冊のアルバムを抱えて現れた。

「これは、嫁入り道具に持っていけ」

アルバムを開いてみると、そこには：

沢山の『笑顔の私』がいた。小学校の入学式の私。体育祭でリレーを走る私。振袖姿の成人式の私。母と桜を見上げる私。カメラ目線の私は、一人もいない。全て父の隠し撮り。だからこそ、自然な笑顔。父だから、娘の一番『笑顔』を知っている。父だから、娘のベストシヤッターチャンスをつえられたのだ。

四十年越しに知った父の愛。その真実に励まされ、新生活への不安も溶解されていった。

：何だ、私の天邪鬼って、パパ譲りだったんだ。泣き笑いで伝えた。「ありがとうパパ」

「佳作」

ばあばのお目め

湧川 あいみ（沖縄県）

ある日。確か私が持病の関係で好きだった仕事を辞めなくてはならなくなり、なかなか決まらない転職活動に焦りを感じはじめていた頃だった。認知症を発症した祖母は、その日も呆けながら窓辺で遠くを見つめていて、私はその姿に理不尽な苛立ちを感じながら洗濯物をたたんでいた。

「あーちゃん？」

祖母ののんびりとした呼びかけに、今思うと恥ずかしくなるほどぶつきらぼうに返事をしながら私は手を動かし続けていた。

「なに？」

「お仕事は休みなの？」

数えきれないほど繰り返し返されたその質問にまた答えなければならぬことに苛立っていたのか、それともそんな質問をさせてしまう自分に苛立っていたのか、私は反射的に大声を出していた。

「目悪くなってきたから、仕事辞めたって言ったでしょ！」
何度も聞いたはずのその答えを、祖母は目を見開き初め

て聞くかのような反応をしながら

「だったら、ばあばのお目めをあげようね。」

と言いつつ、なんの迷いもない穏やかな愛顔で私を見つめた。途端に自分がぶつけてしまった感情の未熟さに気付き、溢れる罪悪感と後悔、そしてこんな私に対する祖母の深い愛情に喉がしめつけられた。

「ごめんなさい。」

絞りだした声とともに涙がこぼれてしまい、とまらなかつた。

「大丈夫よ。ばあばのお目めをあげようね。」

祖母はそう繰り返し返し、おぼつかない足取りで私に近づいた。そしてまた、なんの迷いもない穏やかな愛顔で覗き込み、深い皺だらけの手で涙を優しくぬぐってくれた。

その愛顔と愛情に救われ、前向きに生きることを決意した私も、気づけば愛顔になっていた。

「佳作」

《ドンドンばばあ》の思い出

福島 洋子（長崎県）

「おネエちゃん、雨やで、雨っ！」

激しく窓を叩く音に、午後のまどろみをさえぎられた。驚いて窓辺にかけよると、庇の下に小柄なおばあさんが仁王立ちしている。

「洗濯もん、はよ取り込みや。濡れンで！」

「え？……は、はいっ」

これが《ドンドンばばあ》とのキョウレツな出会い。二十年前の春先だった。

広島から大阪の下町へ引越して二週間。ワンルームマンションの一階だったが、まさか見知らぬ他人から窓を叩かれるとは……。

（こ、これが噂に聞いた大阪人のお節介？）

ちと迷惑だったが仕方ない。私は広島の菓子をかかえ、教えられた隣家を訪れた。

「おネエちゃん、若いのに元気がないな。ちゃんとご飯食べてるか？ どっから来たン？」

しわだらけの浅黒い顔をほころばせて菓子を受け取るや、おばあさんの詮索が始まった。

激務で身体を壊しての退職。結婚を約束した相手との破

局——どん底状態で逃げるよう到来したことなどもちろん黙っていたが、事情があると察したのだろう。翌日から、おそるべし《窓ドンドン攻撃》が始まった。

「おネエちゃん、二丁目角っこのたこ焼きがおいしいねん。水曜日は一個サービスや」

「造幣局の桜の通り抜けには絶対行きや！」

笑顔で礼をいいつつ、内心うんざりしていた私。こっそり《ドンドンばばあ》と名づけ、隣へ越してきた不運を恨めしく思っていた。

しかし、そのアドバイスのおかげで大阪での生活に慣れてきたのも事実。凍りついた心が溶けてきたというか、行動範囲が広がるにつれ、知り合いも笑顔も増えていった。

「ほんまによかったなあ、頑張りや！」

就職を報告したとき、手放して喜んでくれたおばあさん。私も次第に心を許し、《窓ドンドン》と手土産持参での訪問は、大阪を離れるまで三年間続いた。

その《ドンドンばばあ》もすでに故人。だが窓を叩く音と、しわくちゃの温かい愛顔は、いまでも心に刻まれている。

祖父の置き土産

岩渕 里恵子（岩手県）

娘は、自分にとって曾祖父にあたる私の祖父のことを、白髪が多いことから『白いじいちゃん』と呼んでいた。かつては国鉄マンだった。「電気が故障すると、おじいさんしかできねえがらって、夜中に線路さ走ってったのだ」と、祖母は祖父のことを自慢した。

そんな祖父も老いには勝てず、気力と体力、そして聴力までもが弱くなっていった。話すことも笑うこともせず、静かに座っている。それでも食欲だけは旺盛で、そんな祖父を見ていると、「人が生き続ける意味」ということの答えが見つからず、私は悲しくなった。

私が娘を連れて実家を訪れたその日も、祖父は静かに炬燵に座っていた。娘は覚えてたての将棋の相手をしてもらうと、祖父の向かいに座って将棋盤を置き、駒を並べ始める。かつては将棋の名手だったらしいが、もはやその時の祖父が、将棋の指し方を覚えているとはどうも思えなかった。娘はどんどん駒を並べていく。すると、祖父の右手がそろそろと動き始め、自分の前に駒を並べ始めた。そ

れは娘の並べた駒と見事に対照的で、祖父の記憶の正しさを物語っていた。娘が駒を一つ前に進めた。始まりである。祖父も、ごつごつした人差し指一本だけを出して、駒を動かした。そうやって駒があちこち動いていくうちに、娘ははしゃいだ大声で、

「白いじいちゃん、お父さんよりずっと強いんだねえ。サチ、もつと将棋がんばる」

と言った。祖父は毛糸の帽子に手をやり、

「はっは……」

と照れくさそうに小さく笑った。久しぶりに見る祖父の優しい笑顔だった。

あれから二十年。娘は大学のボランティア活動で高齢者の方々と将棋を指し、小学校教諭となった今も、将棋クラブの担当として将棋に携わっている。とうに亡くなってしまう祖父だが、彼に教えられた将棋の技術と楽しさは今も娘の中に生き続け、そしてあの日の笑顔も、私の心の中に生き続けている。

広告

いよてつ高島屋9F
だいかんらんしゃ

大観覧車 くるりん

<営業時間>朝10時~夜10時
<料金> Gondola 1人700円
シースルーGondola 1人900円

お誕生月無料サービス
同伴者とご一緒に1カゴ(4名さま)
無料となります。
※シースルーGondolaは対象外です。

坊っちゃん列車ミュージアム

Botchan train Museum

¥ 入場無料 7:00~21:00 休無休

伊予鉄道創立から
130年の軌跡を展示

坊っちゃん列車の
まどから松山は
どう見えるかな?

市駅前
いよてつ高島屋
からすぐ!

愛媛県イメージ
アップキャラクター
みきやん
許認可番号:2910022

坊っちゃん列車

ほっちゃんれっしゃ

<坊っちゃん列車(1乗車)> 大人800円 小児400円

IYOTETSU

広告

未来へ。

咲く、
きずな、

地域に根ざす、
信用金庫として、
手から手へ。
心から心へと。
つなげてゆきたい
想いがあります。

「愛」ある街のホームドクター

愛媛信用金庫

広告

住友グループ

住友金属鉱山株式会社別子事業所
住友化学株式会社愛媛工場
住友重機械工業株式会社愛媛製造所

住友共同電力株式会社
住友林業株式会社新居浜事業所
三井住友建設株式会社四国支店

広告

たくさんの安心で
一人ひとりの暮らしとつながる。
あなたのそばに、JA共済。

くらしの保障、相談するなら

JA共済

●ご加入にあたりましては、お近くのJA(農協)へお問い合わせください。
■JA共済ホームページアドレス <http://www.ja-kyosai.or.jp>

17481050104

「エピソード部門」 高校生以下の部

「知事賞」

えがお

上甲 真子（愛媛県 小学生）

わたしにはお姉ちゃんとお兄ちゃんがあります。お姉ちゃんはダンスがとくいでいつもおどってます。お兄ちゃんはよこぶえがとくいです。わたしはお兄ちゃんによこぶえでおどるお姉ちゃんにあこがれています。わたしもお姉ちゃんとおなじダンスをならいはじめました。一しよにおどりたいです。

ある日、お姉ちゃんがれんしゅう中に大けがをして歩けなくなりました。リハビリといういたいちりょうをして歩けるようになりました。でも、ダンスはできないそうです。いつもえがおだったお姉ちゃんは毎日なっていました。ママもいつもなっていました。わたしはわからないふあんがいっぱいです。なにもできずにそばにいるだけでした。お兄ちゃんもよこぶえをふいてなくて、おうちの中は電気をつけているのにまっくらなかんじがしてつらかったです。

そんな日がつづいてたけど、うちにお姉ちゃんのえがおがもどってきました。お姉ちゃんがお兄ちゃんと一しょによこぶえをふきはじめました。2人ががつそうをするといえの中が明るくなりました。かぞくがえがおでたのしそうにしているとわたしもうれしくなってしまういつものまにかおどっていました。お姉ちゃんのようにはおどれなくてもお姉ちゃんがわたしを見てニコツとしてウインクしてくれました。そのときにわたしがお姉ちゃんの分もおどろうと思いました。今はみんなえがおです。

お姉ちゃんとお兄ちゃんがつそうしてわたしがおどり、パパとママがおきやくさんです。ずっとかぞくのえがおが見たいです。

「特別賞」

「生きること」は「食べること」

山口 涼加（愛媛県 高校生）

私の祖父母は農業をしている。我が家にはお祝いや特別なことがあつたとき、収穫したもち米でお赤飯を炊いて食べる習慣がある。私は祖母が作るお赤飯が大好きだ。

小学五年生のとき、病気で食欲がなくなったことがあつた。楽しいはずの食事の時間が次第に重く、暗くなっていく。精神的にも落ち込んでしまい、入院することになった。

初めての病院食は、味をほとんど思い出せない。ただただ、一人の食事は心細く、「家に帰りたい——」と何度思ったか分からない。

不安で消えかかるロウソクの火のような私の心。ぼんやりとした意識の中に、突然、祖母のお赤飯が浮かんできた。家族で食卓を囲んできた温かくて幸せな時間。まるでマッチ売りの少女のように、甘くて素朴な、あの味を繰り返し夢見ていた。祖母の優しさが詰まったあのお赤飯なら

食べられるのではないか。祖母のお赤飯が「食べる楽しみ」を思い出させてくれた。「食」は「人を良くする」と書く。「食べること」は「生きること」だ。私は再び生きることを選んだ。その後、少しずつ食べられるようになり、退院することができた。

それからの私は食事の時間を大切にするようになった。短い時間でも家族と一緒に食べる。特別な理由はいらない。時間を共有できること、ただそこに自分や家族がいる。それだけで幸せだと気づいた。何気ない日常の中にこそ感動はある。

高校生になった今でも、祖母のお赤飯が食卓に並んでいる。誕生日や学校行事にはお赤飯が一つ、二つ……。多くの人が思い描くごちそうではないかも知れない。けれど、私にはどんな豪華な料理よりもごちそうだ。

「いただきます。」

一口箸で掬って、よく噛んで食べる。口いっぱい甘さが広がる。おそろいの顔をして家族も笑っている。今日も手を合わせて

「ごちそうさまでした。」

絶品！笑顔の三十五段ビッグバーガー

武智 旭飛（愛媛県 中学生）

「中学校三年間をハンバーガーに例えると、二年生はパンの間の具。普通のハンバーガーになるか、盛りだくさんのハンバーガーになるかは自分達次第。お得で最高級のハンバーガーになりましょう。」と中学二年生に進級したばかりの僕達に先生は言った。

僕はどんなハンバーガーになりたいのだろうと考えた。まず自分の長所を考えてみると、僕のいいところは健康で元気なところだ。僕は「楽しく生きる」をモットーに毎日を過ごしている。楽しく生きていくからこそ元気でいられる。祖父が「勉強するのと食べることは、誰にも取られないから、しっかり勉強してご飯を食べなさい。」と言ってくれたことを僕は大切にしている。お金や物は人に盗まれることはあっても、頭の中に入った知識や、お腹の中に入った食べ物、つまり丈夫な身体は人に取られたりしないということだ。

しっかり食べて健康管理をし、元気な心と身体を持っていれば、勉強をして新しい知識を、増やせる。知識がないと、

だまされたり損をすることが多くなるから、楽しい毎日が過ごせなくなる。毎日楽しんだもの勝ちだと思っているので、たくさんご飯を食べて、たくさん勉強して、知識をどんどん増やしていこうと思う。そうすれば僕は、色々なものがたくさん詰まった最高級のハンバーガーになれると思う。

しばらくして、僕達の学級目標が

「絶品！笑顔の三十五段ビッグバーガー」

に決まった。三十五というのはクラスメート三十四人＋先生を示している。色々な味の、個性豊かな具材だけれど、絶妙な味付けになるはずだ。なぜかという、先生がいつも言っている「みんなが」ではなく「みんなで」というキーワードが最高のつなぎになるはずだ。みんなで一つつつ、積み重ねていくハンバーガーの出来に、「このクラス、最高！」と先生に愛顔で言わせたい！

心つなぐお接待

藤田 桜子（愛媛県 高校生）

私の家は八十八か所霊場のお寺のうちの一つだ。家の周りには「へんろ道」と呼ばれる道があったり、おへんろさんが休息できるようなベンチもある。そんな、おへんろさんを気遣う文化のうちの一つに、お接待というものがある。四国八十八か所を回るおへんろさんと呼ばれる人々の目的は様々だ。無病息災を願う人や身内の供養を理由とする人もいる。父や母がおへんろさんに「お接待です」とみかんやお茶を手渡しているのを見ていた私は幼い頃、おへんろさんにお接待をしたことがある。ろうばいの種をおりがみで折った封筒の中に入れ、覚えてたのひらがなで「ろうばいのたね」と書いて手渡したのだ。

お接待という文化に興味を持った幼い私は見つけるとすぐおへんろさんに駆けより手渡していたそうさ。ありがとうと言ってくれたおへんろさんの笑顔は今でも忘れることはできない。嬉しいのはそれだけではなかった。数年して、また再訪したおへんろさんが、写真を見せ「あなたのくれたろうばい、こんなに大きくなったのよ。」と声を掛けて

くれたのだ。その日からただ手渡すものだと思っていた私のお接待の意識は変わった。おへんろさんの苦労を労うだけでなく自分の気持ちまで朗らかになるのだ。

この経験から、お接待という四国独特の文化は素敵なものだと思えるようになった。お接待が昔からある理由は、様々な理由で各寺を回るおへんろさんの心にそっと寄り添うことができるからだと言った。お接待をする人もそれを受け取る人も優しい気持ちになれる。これほどまでに素敵な文化はないと思う。そして、これからもお接待を続けたと思う。時々、「あのろうばいは、花がついているかな」と思いを馳せながら。

「感謝する」ということ

水成 友美（愛媛県 高校生）

私は小学生の時、自校式の給食で育ちました。そして、私の母は、その給食を作っていた、いわゆる給食のおばさんでした。

下級生だった当時の私は、好き嫌いが多く、昼休み中も給食を食べていました。給食は嫌い、お弁当がいい、と思う日が続きました。

三年生になったある日、一番人気のからあげが出ました。珍しく早く食べ終わり、食器を片付けていると、友達の一人在私に、

「ねえ、友美ちゃんのお母さんって、給食のおばちゃんやろ？今日のからあげおいしかったけん、ありがとうって言ううとってや。」

と言いました。そんなことを頼まれてとても驚き混乱した私には、いいよと言うのが精一杯でした。夜、母に伝えると、

「おいしかったん？よかった。」

と微笑みました。私ははっとしました。給食が私達のことを考えて作られていることを、その笑顔から知ったので

す。その時、初めて、給食を作ってくれる母へ感謝しました。

次の日から、食器を給食室へ返却するときに「ありがとうございます。苦手だったものも少しずつ食べられるようになり、何より「ありがとう」を言うことが増えました。

私が中学二年生の時に、給食は給食センターから届くようになり、自校式は廃止となりました。しかし、高校生になった今でも、お弁当を作ってくれる母に、お弁当の感想を伝えることは変わっていません。そのたびに母は笑顔になり、次の日もその次の日も、おいしいお弁当を作ってくれるのです。

私は、母や友達から感謝することの大切さを学びました。何も特別なことをしてもらった時だけではありません。お弁当や洗濯など、日常の中の一コマにこそ、感謝の言葉は必要なのだと思います。これからも、感謝の気持ちを持ち、笑顔と感謝の輪をつなげていきたいです。私は、今日も母に言います。

「おいしかったよ。いつもありがとう。」

温かなバス

大下 雅子（愛媛県 高校生）

私はいつも、路線バスで通学しています。宇和海に面したりリアス式海岸に沿い、蛇行しながら進むので、毎朝無駄に時間がかかります。しかし、私はこの時間が一日の中で最も好きです。揺れるバスの中で、かすかに漂う潮のにおいを感じながら、お気に入りの音楽を聴いているととても癒されます。

さて、毎朝このバスに決まって乗車する高校生は私だけです。時間によっては、貸切り状態になることも多々あります。しかし、このバスはなくなりません。なぜなら、高齢化した私の地域において、多くの高齢者の大切な足となっているからです。

ある朝、私がいつも通りバスに乗っていたときのことです。人のいないバス停で、バスが少しの間止まったことがあります。するとしばらくしてから、おばあさんがあわてて乗車してきました。運転手さんは、いつも乗車するおばあさんを待っていたのです。また、これは近所のおばさんから教えてもらった話なのですが、雨の日にバスが私の乗

車するバス停で少し止まっていたことがあったそうです。私は、親の仕事の都合上、雨の日は自家用車で送迎してもらっています。そのため、時間になっても現れない私を、バスは待ってくれていたのです。その日は、近所のおばさんが「雨の日は乗らんのよ。」と、運転手さんに伝えてくれたそうです。申し訳なく思う一方、とてもありがたく感じました。

田舎の路線バスは、都会の交通機関のように速くもなければ、電子マネーでの支払いもできません。しかし、そこには田舎の路線バスならではの温かさがあります。先述以外にも、バスの中ではぐくまれる高齢者の友情など、目頭が熱くなります。来年、私は高校を卒業するとこのバスには乗らなくなります。しかし、このバスがたくさんの高齢者と、温かな思いやりを乗せ、リアス式海岸のカーブをいくつも曲がりながら走り続けることを祈っています。

おとしもの

泊

萌花（愛媛県 高校生）

祖母は認知症だ。はじめは、物をすぐになくしたり、予定を忘れていたりする程度だった。しかし次第に、買い物
の帰り道で迷ったり、飲食を忘れてたりと症状は目に見えて
悪くなっていった。

「そこで知らん人が寝とる」

祖母はぼつりと呟いて、真ん丸に見開いた目で祖父のことを見つめていた。一瞬時間が止まったかのように感じた。
祖母は、祖父を通りこしてもっと遠くを見ていた。私が、
「何言つとんの。じいちゃんやろ」と返しても、祖母は動
かないまま、「ああ」とため息のような音をもらすだけだっ
た。衝撃だった。祖母は私や私の母に、時々「あんた誰やっ
たかな」と問うことはあった。しかし、何十年も寄り添っ
てきた祖父のことだけは、決して忘れなかった。それなの
に、いびきをかいて眠る祖父の記憶は、買い忘れた人参や、
レジに忘れてきたお釣りのように、どこかにぼつんと置き
ざりにされてしまった。

それから間もなくして、祖父が他界した。棺の中で横た

わる祖父は、何かがすつぽりと抜けおちていると一目で分
かり、私は悲しかった。祖母は通夜が始まる直前に来た。
しかし、誰の通夜なのかは理解しておらず、とりあえず出
席しているだけだった。「棺の中見たい」と開いても「怖
いけんいやよ」と首を振るばかりだった。そして結局、葬
式が行われる日にも祖母は記憶を取りもどすことはなかつ
た。病気だから仕方のないことだとは分かっているけど、ど
うしても諦めきれなかった。棺のふたを閉める直前、「怖
くないけん、お花入れてあげ」と言うと、不思議にも祖母
は素直に従った。祖母は祖父をじっと見つめ、「あなた」
と呟いて泣き崩れた。祖母の中に記憶が流れこんでいった。
二人で過ごした楽しい日々、思い出達を、やっと思い出し
た。「ありがとう、あなた」そう何度も呟く祖母の小さな
背中が、ほんのり輝いて見えた。

笑ったら明日もまた来たくなる

森山 ひかる（千葉県 中学生）

私の通う浦安中学校は、二つの小学校が集まっています。そのため、入学式の時は、新しいクラスのほとんどが知らない人でした。

ひと月たちふた月たつと、ほとんど知り合いになるので、クラスの中にあまり学校にこない子も出始めました。そして、小学校の時もそうでしたが、だいたい隣の席だったり、同じ班だったりしました。その為宿題や配布物をその子の家に持って行ってあげて、

「明日は来られますか？」

とたずねる役割を任されるのです。これもなかなか根気のいる仕事で、嫌な顔をされたりもう放っておいてください、と言われたりしてひどく傷つくこともあります。

そんなある日、しばらく休んでいた子が久しぶりに登校しました。その日は、私もとてもテンションが上がって、来られてよかったねと、大喜びだったのですが、友達からあんなに喜ばれたら、ちょっと嫌かも・・・と少し自制をするように言われました。

そこで、次の日は静かにしていました。ただ、どうしても給食の時には、大好きなメニューだったというのもあり、大はしゃぎしてしまいました。四人分くらい食べている姿を見て、ずっとお休みしていた子がくすくす笑い出しました。

「小さいのによく食べるんだね。」

とにっこりほほ笑んで言いました。笑った顔を見たうれしさから、あれまー、のような表情をしたらしく、班の男子も女子もその顔がコントをするような顔だったので、大爆笑していました。その笑い声につられて、その子もおなかを抱えて笑っていました。おそらく、コメディアンって、こういう気持ちなんだろうな、と思いました。嬉しいの一言です。

その後、その子は毎日登校するようになりました。笑ったら、みんな明日もまた来たくなくなります。ワクワク来れるのが一番です。

大好きな先生

長谷 咲季（愛媛県 高校生）

音楽の先生が亡くなったのは、高校二年生の春だった。

中学三年生の時、文化祭で合唱コンクールのリーダーを任された。もともと人前に立つのは得意ではないし、みんなをまとめる力もない私は合唱コンクールが不安で仕方なかった。そんな時、悩んでいた私に先生が言った。

「何があってもどんなに辛くても笑っていなさい。どんな時でも笑顔を忘れないこと。あなたの笑顔を見せて。」

と言って私の頬を両手で包んでくれた。その言葉と先生の手ぬくもりが不安でいっぱいだった心に溶け込んでいった。先生の、顔をくしゃくしゃにして笑う顔が大好きになった。

合唱コンクール一週間前、突然先生は学校に来なくなった。そして合唱コンクールの当日も先生は来なかった。

先生が病気だと知ったのは、合唱コンクールが終わった次の日だった。他の先生たちは「すぐに元気になって戻ってくるよ。」と言っていたが、先生が学校に戻ってくることはなかった。

卒業してから二年たった高二の春に友達と先生を訪ねた。先生に会うのは、久しぶりで妙に緊張した。先生は、痩せ細り別人のようだった。でも、一つだけ変わっていないのがくしゃくしゃにして笑う顔だった。帰り際、先生は私に「あなたは、変わったね。これからも笑顔を忘れないで。その笑顔をたくさんの人に届けてね。」と言った。それから少しして先生が亡くなったと知らされた。先生は、亡くなる直前までずっと笑顔を絶やさなかった。

先生は、最後に私に笑顔の大切さを教えてくれた。私は先生の笑顔に何度も助けられた。今度は、私が人を笑顔にしていける番だ。笑顔の大切さを教えてくれた先生には本当に感謝している。だから、天国にいる先生に伝えたい。

「先生、私は今日も笑顔です。」

おじいちゃんの絵手紙

河野 真希（愛媛県 高校生）

私のおじいちゃんは絵を描くのが上手くて、おじいちゃんの家には、おじいちゃんが描いた絵がたくさんあります。そして、おじいちゃんは書道も好きで、私が小学生の時には書き初め大会の練習を一緒にしてくれていました。

そんなおじいちゃんが、私の家に絵手紙を送ってくれるようになったのは、高校一年生の秋でした。初めて送ってくれた絵手紙には、

「食欲の秋、勉学の秋、いつまでも姉妹仲良く」

という言葉に、ぶどうの絵が描いてありました。絵手紙を送ってもらったことのなかった私は、それが嬉しくて、おじいちゃんの絵手紙がくるのが楽しみでした。

おじいちゃんの絵手紙に後ろ向きな言葉が書かれたことはありません。どの絵手紙にも前向きな言葉が書かれています。

「どっしり構えて元気で歩きます」

「頑張ろう暑い夏を乗り切ろう」

「お届けします元気のもと」

おじいちゃんの絵手紙に書かれてある言葉です。絵手紙が届くたびに疲れていた心がすっと軽くなるような気がして、おじいちゃんってすごいなあと感じています。

おじいちゃんに、

「いつも絵手紙ありがとう、毎回楽しみにしてるよ」

と言うと、おじいちゃんは、

「そうか、良かった良かった」

と答えてくれました。その時のおじいちゃんの顔は照れくさそうで、でも嬉しそうに笑っていました。私はもっと嬉しくなりました。

こんな素敵なおじいちゃんの好きな言葉は、

「笑顔満開」

です。私はいつも「笑顔満開」のおじいちゃんが大好きです。

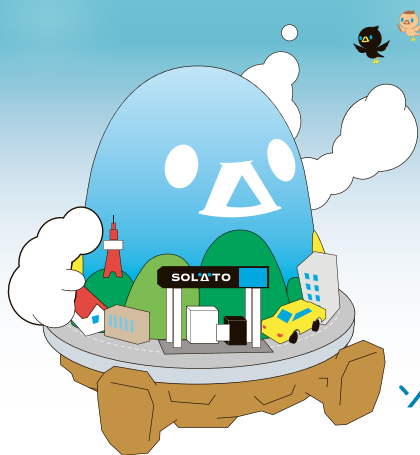


広告

大王製紙の森は
ただいま、約59,000ha。
東京23区とほぼ同じ面積。

大王製紙株式会社

東京都千代田区富士見二丁目10番2号 TEL 03-6856-7500(代)
<http://www.daio-paper.co.jp/>



ずっと一緒に。

ソラトくん

広告

本社

東京都千代田区内幸町2-2-3 日比谷国際ビル15F
TEL 03-3502-1601(代)

この星と人のチカラに。

SOLATO

太陽石油株式会社 <http://www.taiyooil.net/>



明屋書店
HARUYA

明屋書店MEGA平田店

~nota nova (ノータ・ノーヴァ) stationery~



書籍・雑誌・コミック・CD&DVD・Blu-ray・GEO

「nota nova」の商品構成は
幅広く、文芸については
高麗万年筆から定番の
実用文具、学業文具、
ファッション文具まで
フルラインを取り扱います。

愛媛県松山市平田町81-1

☎ 089-978-0600

10:00~22:00

年中無休



SerenDip 明屋書店 アエル店

広告

お客様の興味や暮らしを提案



松山でここだけ!

おとなデイズコーナー

明屋書店
HARUYA

www.fuji-haruya.com/

愛媛県松山市大街道2-5-12

アエル松山 2F

☎ 089-941-4242

10:00~22:00 (年中無休)



広告

株式会社フジは、おかげさまで創業50周年。

お客さまが手に取るもの、お客さまが出会うことすべてを
今日とは違う、新しい喜びで満たしたい。

それが、私たちフジの願いです。

これからも、地域のにぎわいを

創造するトコロとして、たくさんのうれしいコト、

たのしいコトをお届けしてまいります。

まちにいいコト。
ずっといいコト。



【本部】松山市宮西一丁目2番1号

「写真部門」

知事賞

一休み

秋田 寿美（大阪府）

二人で近所の公園を散歩するのが日課です。



白川義員特別賞

キラキラの
海と愛顔

金子 ふみ（愛媛県）

キラキラの海に負けないくらいのキラキラな愛顔です。



河原学園賞

ママのほっぺに
チュー

福本 将太（愛媛県）

来島海峡大橋を観に行った時にママのほっぺにチューしました。



優秀賞

泥んこ笑顔

雪本 信彰（高知県）

地元農協主催の泥んこスポーツ大会。リレーに出場し「しんどかった！でも楽しかった」と満足そう。



優秀賞

未来永劫

佐々木 順哉（埼玉県）

この先の人生を見つめるような笑顔に思わずシャッターを切りました。



優秀賞

ママさん、
元気出して！

横山 彰仁（静岡県）

亡くなる2日前、危篤状態の母のために病院から特別な許可をいただき、大切な家族がお見舞いに訪れた。



入 選



カミさんの一番の笑顔

倉田 康平 (東京都)

カミさんが40代最後の年に記念に写真を二人で撮った時の一枚です。私のお気に入りです。



お腹をかかえて大笑い

阿蘇品 祐子 (熊本県)

出産予定日を控え、楽しそうに笑う友人の姿です。喜怒哀楽豊かな子が生まれるに違いないと確信しました。



菜の花でゴロン

戸塚 知美 (愛媛県)

大洲の五郎の河川敷にて、菜の花がキレイで思わずゴロンとしたときに満面の笑みが撮れました。



全部で90個、 ギョウザのできあがり～

宮谷 伸司 (愛媛県)

孫の葉月が初めてばあばと餃子作りに挑戦。自分で具を皮に包み、2人で90個が完成。やったー！満面の笑顔。



おかしくてたまらない

宮川 伸 (高知県)

おかしくて笑いが止まらなくなり、手をつないで爆笑する表情が、何とも無邪気で微笑ましい。



知事賞

ハニカミ王子

田中 津宮美 (愛媛県)

クラスマッチで普段は見せない、彼のはにかんだ笑顔を見逃しませんでした。



白川義員特別賞

鳩のっちゃった!

羽石 桃子 (神奈川県)

鳩に餌をあげたら乗ってくれました。本人は嬉しそうでした。



河原学園賞

となりで。

蓬莱 あみ (兵庫県)

こっそり撮ってたつもりだけど、あっ…。目があってしまった。バれてしまい大笑い。



知事賞

どろんこ祭りの
早乙女たち

栗田 音羽 (愛媛県)

五穀豊穡を願って毎年行われる地域の祭りです。みんな積極的に参加してくれています。



白川義員特別賞

造作

赤間 七緒 (東京都)

教室で友達がじゃれあっていると
ころを撮りました。



河原学園賞

もう、
撮らんといてや～

山口 智大 (愛媛県)

ちょっと今食べよるんやけん、恥
ずかしいけん撮らんといてー！



知事賞

妹の夏祭り

丹羽 凜空 (宮城県)

楽しそうにおどっていた妹



白川義員特別賞

弟のお風呂

林 花菜 (大分県)

お父さんと気持ち良さそうにお風呂に入っている弟の姿。自分のカメラで撮りました。



河原学園賞

笑顔でカウントダウン、
3・2・1!

金谷 美羽 (愛媛県)

全力で泳いだ校内水泳記録会。みんな「やりきった!」という思いがあふれた、いい笑顔ですね。



愛媛県商工会議所連合会賞



おさるさんといっしょ

尾崎 祐輔（愛媛県）

動物園で、おさるさんたちに
会った直後の愛顔。

一般の部



幸せのひととき

馬場 歩（埼玉県）

孫の成長を喜ぶ祖父。幸せのひ
とときです。

愛媛広告協会賞

愛媛県PT推進協会賞



ピース！

下河内 萌生（広島県）

クラスマッチの試合前にとった
写真です。

高校生の部



祖父と祖母の微笑み

平林 柚葵（長野県）

自分の高校合格祝いでいった旅
行の際に撮影した写真です。

愛媛経済同友会賞

中学生の部



夜は更けていく

高橋 菜々美 (愛媛県)

朝までずーっと話そうや

愛媛県理容生活衛生同業組合賞



とったぞ・・・

木原 美羽 (愛媛県)

「騎馬戦」で相手の帽子をとったぞ・・・うれしさ爆発のガッツポーズ

愛媛県歯科医師会賞

小学生の部



さくらスマイル

大島 脩斗 愛知県

パパもママも、ぼくも、ももちゃんのかわいい笑顔が大好き。ずっと守ってあげるよ。

愛媛県情報サービス産業協議会賞



1人でおきがえできたよ☆

窪田 宜久 (愛媛県)

おとうとが初めて1人でおきがえをしていました！何か変だなあ～(^^;でも、とっても嬉しそう(^^)

愛媛県獣医師会賞

審査委員紹介



新井 満
(審査委員長)

1946年新潟県生まれ。作家、作詞作曲家、写真家など多方面で活躍。1988年、『尋ね人の時間』で第99回芥川賞受賞。2005年、『この街で』（作詞：新井満、作曲：新井満、三宮麻由子）を制作。2007年、『千の風になって』で第49回日本レコード大賞作曲賞を受賞。2014年、正岡子規の俳句にメロディをつけ、松山市民の愛唱歌「春や昔」を制作。子どもから大人まで松山市民に愛される曲となる。



神野 紗希
(審査委員)

1983年愛媛県松山市生まれ。2001年、松山東高等学校時代に第四回俳句甲子園にて団体優勝、「カンの余白八月十五日」が最優秀句に選ばれる。2004年、第一回芝不器男俳句新人賞坪内稔典奨励賞を受賞。2006年から、6年間、NHK『俳句王国』司会を担当。現在、明治大学・玉川大学講師。



白川 義員
(特別審査員)

1935年愛媛県四国中央市生まれ。ニッポン放送、フジテレビを経て、1962年フリー写真家。1993年に南極大陸一周に成功（史上初）。1996年から「世界百名山」撮影プロジェクトを開始、作品集「世界百名山」を出版。2002年、国連が「国際山岳年」を記念して、作品集「世界百名山」の中から12作品を選んだ記念切手を発行。記念切手12種類全点を1作家で制作したのはフェルメール、ダリ、ピカソなどに続いて世界で11人目、写真では初。2012年11月、作品集「永遠の日本」発表。

1972年、第13回毎日芸術賞 1972年芸術選奨文部大臣賞
1988年、第36回菊池寛賞 1995年、第27回日本芸術大賞
※上記日本を代表する芸術4賞総てを受賞したのは、文学、美術、音楽等総ての表現分野を通して白川義員ただ一人。

このほかにも、1981年、全米写真家協会最高写真家賞（史上10人目）を受賞するなど世界を代表する写真家。



中村 時広
(審査委員)

1960年愛媛県松山市生まれ。1982年三菱商事株式会社入社。1987年愛媛県議会議員。1993年衆議院議員。1999年愛媛県松山市長。連続3期当選。2010年愛媛県知事。2014年再選、現在2期目。

子どもたちの未来のために、 伝えたい想いがあります。

JAバンクえひめでは、食と農業に対する学習や農業体験などを
はじめとした様々なCSR活動を通じて、
自然と調和・共生できる循環型社会の実現をめざし、
地域の皆様の豊かな未来の実現に取り組んでいます。

JAバンクえひめキャラクター
ぱんじゃくん



JAバンクえひめ

JA うま

JA 新居浜市

JA 西条

JA 周桑

JA おちいまばり

JA 今治立花

JA 松山市

JA えひめ中央

JA 愛媛たいき

JA にしうわ

JA ひがしうわ

JA えひめ南

JA 愛媛県信連



JAバンク えひめ

(愛媛県下JA / 県信連)

「JAバンクえひめ」は、愛媛県下12JAと県信連の総称です。

JAバンクえひめ

検索

えがお
愛顔感動ものがたり

「感動のエピソード」

& 「愛顔の写真」

平成三十年二月発行

発行 愛媛県

企画振興部地域振興局

文化・スポーツ振興課

〒七九〇―八五七〇

愛媛県松山市一番町四丁目四―二

TEL (〇八九) 九二二―二九七二

印刷 佐川印刷株式会社

■ 平成28年度 知事賞「卵かけご飯の愛顔」 矢代 稔



■ 平成28年度 特別賞「あの夏の花火」 丸山 かおり



「エピソード」部門の知事賞・特別賞受賞作品については、水樹奈々さんの朗読に田村祐子さんのサウンドアートアニメーションを合わせた動画作品をインターネットで配信しています。

愛顔感動ものがたり

検索

